

# 容易の意の「ヨシ／ヨイ」の語史

近藤 明

A Historical Study of *yoshi/yoi*, an Adjective Expressing Ease in Performance.

Akira KONDOH

## 一 はじめに

本稿で取り上げる「ヨシ／ヨイ」は、「住みよし」「住みよい」のように、「ヨシ」「ヨイ」が動詞に下接する形で用いられ「容易」の意を添えるとされるものである。以下これの総称としては「ヨシ／ヨイ」を用いることとするが、主に古語について述べる時は「ヨシ」「ヨイ」、イ音便形が終止形として一般化する中世後期口語資料以降について述べる時は「ヨイ」「イイ」の形も含むと称することとする。

まず現代語での意味・用法を押さえておくこととしたいが、森田良行(一九八二)では「ヨイ(イイ)」について「ヨヤスイ」と比べて次に記述されている。

「ヨイ」は用法上かなり制約がある。客観的な状態「台風の来やすい地方」とは言っても、「来いい地方」とはふつう言わない。「壊れやすいガラス瓶」「はずれやすい戸」「取れやすいネジ」など、「くやすい」は、そのような状況を性質として対象が持っている客観的な状態に用いる。「扱いいい連中」「飲みいい菓」「履きいい靴」など「ヨイ」は、行為・動作の主体が感じ取る『…しやすい状態』であり、きわめて主観的な

評価である。意志的な行為に伴い、無意志的な動詞や自然現象をあらわす動詞には「ヨイ」は付かない。「壊れいいガラス瓶」などとは言わない。(中略)「くやすい」は『容易な状態』のほかに『ややもすれば、すぐそうなってしまう』なりがち『…しがち』の状態も指す。前者はプラス評価で「描きやすい図形」「覚えやすい名前」「読みやすい活字」「覚えやすい名前」「弾きやすい曲」「作りやすい花」などと言う。／後者はマイナス評価となり、「折れやすい金具」「脱線しやすい区間」「脱落しやすい活字」「病気になるやすい体質」などを用いる。「ヨイ」は主体側の『…することが容易でよろしい』むずかしさ、苦しさがなくて快感を覚える』というプラス評価の語である。

ここで述べられていることは筆者としても領けるところが多いのであるが、若干整理して述べると次のようになるか。

○「ヨイ(イイ)」は主体の意志的動作を表す動詞に接続し、「容易にできる」ことを表す。無意志的動作や自然現象を表す動詞は接続しない。一方「ヨヤスイ」の上接動詞にはそのような制約はない。

○「ヨイ(イイ)」はそうなることが好ましいというプラスの

評価が伴う。一方「～ヤスイ」は、価値観・評価を伴わずに客観的な状態を述べる場合や、「壊れやすいガラス」等マイナスの評価を伴う場合もある。「容易な状態」の意味はプラス評価で、「～ヨイ」が「しがちの状態」の意味はマイナス評価である。

なお八尾由子(二〇〇六)は、第一点と第二点を関連づける形で、「～ヤスイ」の上接動詞が意志的な性質のものである場合は、容易性のうち、主体が意志を持って行おうとしたことが容易に実行できるという意味を表すが、上接動詞の意味が無意志的であるか好ましくないことである場合は、容易性のうち「簡単にしてしまう」ことや、傾向の「～ことが多い」という意味を表すとしている。「～ヨイ」については言及されていないが、後者の用法が「～ヨイ」には無いということになるうか。

また第二点の評価について、小池清治(二〇〇二a)は

「イイ」「ヨイ」は形容詞「良い」から派生したもので、本来「よい傾向」を表すものであったが、「ややもすると」の意を含蓄して、「悪い傾向」を表す場合もある。

とし、「字体が明瞭で読みやすい」「読みいい」はどちらも「容易」の意を表すものとして成り立つが、「悪い傾向」を表す「間違っ読みやすい」「目が疲れやすくなった」に対する「読みいい」「疲れいい」は非文であるとしている。このうち「～ヨイ」の『悪い傾向』を意味する場合<sup>1)</sup>というのは、森田良行(一九八二)では無いとされた用法であり、筆者の感覚でも現代共通語では考えにくく、具体的な用例が知りたいところであるが、それは示されていない。

ちなみに近藤明(二〇〇七)でも触れたが、『国会会議録検索システム』によって、次のような「腐りよい」という例が検索でき

た。発言者は堀本宜実議員(一九〇〇～一九七八)である。

①牛乳なんというものの製品は大へん腐りよい足の早いものでございまして、遠方の加工業者にこれを送るわけには参りません。(第三六国会 参議院農林水産小委員会第二号「一九六〇年十月二日」会議録 <http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/sangin/036/0408/03610210210408002c.html>)

これは上接動詞が「腐る」という無意志的なものであることに加え、プラス評価も伴っていない(マイナス評価か、少なくとも評価を伴わずに客観的な性質を述べていると見られる)点において、森田良行(一九八二)の記述とは反する。小池清治(二〇〇二a)の「悪い傾向」を表す場合もある<sup>2)</sup>というのはいはここのような例を指すのかも知れないが、『国会会議録検索システム』で見出すことができるのも右の一例だけで、現代共通語として一般的なものは考えられない。右の用例の発言者である堀本宜実議員は愛媛県越智郡玉川村(現今治市)出身で、愛媛県の選挙区から選出されており、地域的な特色のある用法と見ておきたい。

なお、同じ動詞に「～ヨイ」が接続する場合と「～ヤスイ」が接続する場合の異同について森田良行(一九八二)は

対象に容易さのある場合は「書きやすい文字」のように「～やすい」を使い、主体側に原因がある場合は「書きいい万年筆」のように「～いい」を用いるのが自然である。

とするが、この辺はかなり微妙である。例えば「住みよい」と「住みやすい」の用例を、朝日新聞の全文データベース「開蔵・Digital News Archives for Libraries」<sup>3)</sup>によって日付の新しい順に各二十例ほど見た限りでは、「住みやすい」は「交通の便」といった利便性、「夏涼しい」といった気候のよさ、村営住宅・上下水道整備・バリアフリーといった住環境、子育て支援・小児救急医療の充実といった制度面との関わりで述べられることが多いのに対

し、「住みよい」はそれと重なるところもあるが、「緑豊か」「花いっぱい運動」「心豊か」あるいは「安全・安心」といった要因とともに述べられることが、しつて言えば目につく。微妙ながら、「住みよい」の方がやはり主体側の主観的な要因に基づくことが多い、ということになるうか。

以上のような点を踏まえて、「ヨシ/ヨイ」の意味・用法が上代以来どのように変化してきたか、類義の「ヤスシ/ヤスイ」との関連も顧慮しつつ、第二節以降で見ていくことにする。

## 二 上代と中世前期

### 二-1 上代

上代では、「ヨシ」は万葉集に8例見られる(うち万葉仮名表記は2例。他の例も「ヨシ」の部分で「吉」となっているが、「ヨシ」と訓むことはほぼ確実と考える)。上接動詞は

あり1 聞き1 住み4 待ち1 行き1

であり、このうち上接動詞が「あり」である「ありよし」は、②のように「住みよし」と対の形で使われており、この「あり」は「住む」と類義的と考えられるので、結局右の上接動詞はいずれも意志動詞的なものと考えられる。

②三香原 久邇の都は 山高み 川の瀬清み 住みよし(住吉)  
と 人はいへども ありよし(在吉)と 我は思へど…

(万葉集 一〇五九)  
③あをによし奈良の大路は行きよけど(由伎余家村) この山道  
は行きあしかりけり  
(同 三七二八)

いずれの用例も、肉体的・精神的負担が少なく、その動作をする

のに好適であるといったプラスの評価を伴うと言える。現代語の「ヨイ」について森田良行(一九八二)で述べられていた「主体側の『…することが容易でよろしい』『むずかしさ、苦しさがなくて快感を覚える』というプラス評価の語」という指摘は、上代の「ヨシ」にも当てはまると言つてよいであろう。

なお③の例で「行きあし」と対比的に使われていることから、「アシ」<sup>(2)</sup>と対義的であったことが伺われるが、後の時代においては「ヨシ」と対比的に使われるのは

④もしきのうちのみつねに恋しくて雲の八重たつ山はずみう  
ら  
(新古今和歌集 一七一七)

のような「ウシ」や(この「すみうし」は「横川の水はすみよかるらむ」という一七一六の歌での問いに対応した表現と見られる)。

⑤善見城ハスミヨカリシカドモ、地獄之鉄城ハスミニクカリケ  
リ。(中略)帝釈之宝座ニハヤヨカリシカドモ熱鉄ノ床之ウヘ  
ハアソビニクカリケリ。(宝物集 二三オ⑨・⑩)

のような「ニクシ」等であり(後掲の⑩の例でも「ニクイ」が「ヨイ」と対比的に使われている)、動詞に下接する「アシ」は用例そのものが中古以降はあまり見られなくなる。単独の形容詞としても「ヨシ」と対義語的と見られ、動詞に下接する用法も上代には既に持っていた「アシ」が、中古以降「ヨシ」の対義語としての位置を保ち得ず、他の語にとつて代られたように見えるのはなぜなのか、説明を要するところであろう。

また近藤明・天谷友美(二〇一〇)で述べたように、「ヤスシ」は万葉集に10例あり、1例を除いてマイナス評価と見られる。

表1 中古～中世前期の「～ヨシ」(散文系資料)

	伊勢	宇津保	落窪	枕	源氏	紫	寝覚	浜松	更級	狭衣	大鏡	讃岐	今昔	宝物	著聞	撰集	平家
遊び								1						1			
浴み														1			
あり					1		1	1	1								
言ひ											1						
射																	1
聞き					1	1				1							
さぶらひ		1															
住み	1	4			3						1			2		6	1
つかうまつり		1	1		1												
使ひ		1	2										1	2	1		
通り												1					
乗り														1			
伏し										2							
参り				1						1							
ゐ														2			

二一 中古～中世前期

歌では「すみよし」に集中し(地名「住吉」にかけた用例も多い)、八代集での用例はいずれもそうである(古今2 拾遺2 後拾遺1 千載1 新古今4)。散文系資料では中古～中世前期のものについて上接動詞ごとに見ると表1のようである。

⑥ 「いとつかひよきてづくりの針のみみいとあきらかなるに、しなののはつりをいとよきほどにすげて、をうなのきぬにぬいつく」  
(宇津保物語 俊蔭 上三三③)

⑦ 風もすこし吹よはり、扇もぬよげにぞなツたりける。  
(覚一本平家物語 卷十一 那須与一 下三一九①)

上接動詞としては、人間関係(伺候・使用の関係も含む)「さぶらひ」「つかうまつり」や「使ひ」の一部の例等)を表す動詞、⑥の「使ひ」のような道具の使い勝手に関する意味の動詞、⑦の「射」のような技術的難易に関わる動詞、視覚・聴覚に関する動詞に接続する例等が目立ち、後の時代や現代にも共通するものも多い。上接語が意志的動詞であること、「主体側の『…することが容易でよろしい』『むずかしさ、苦しさがなくて快感を覚える』というプラス評価の語」という指摘が当てはまることは、上代と同様である。

一方で「くヤスシ」の上接動詞は、近藤明・天谷友美(二〇一〇)でも若干触れたが、無意志的な動詞・自然現象を表す動詞も多いものの、意志的動詞も「慰め」(大和物語)、「帰し」(宇津保物語)、「立ち走り」(源氏物語)、「あなづり」(2例)、「越え」(枕草子)、「いとひ」(千載集)、「申し」「回し」(覚一本平家物語)、「折り」(とはすがたり)といったものが見られる。(3) 評価については、やはり近藤明・天谷友美(二〇一〇)でも触れたように、

上接動詞からはプラスの評価を伴いそうに思われても、実際の用例を見ると、「簡単にくってしまう」ことへの懸念や安直性に対する見下し・拍子抜け・皮肉を伴っていたりして、マイナス評価の見られるか、少なくとも全面的にプラス評価と見るのは躊躇されるところが多い。例えば

⑧ 宮す所「これもかへしやすき御つかひになむ」と聞こえ給ひて  
 (宇津保物語 内侍のかみ 上四一五④)

は新編日本古典文学全集の頭注に「清涼殿に帰ろうとする帝を、追い返されるお使いに見立てて戯れたか」とあるように、皮肉を込めた言い方の中でこのようなものであるし、

⑨ 「一定勝浦候。下臈の申しやすひについて、かつらと申候へども、文字には勝浦と書て候」

(平家物語 卷十一 勝浦 付大坂越 下三〇八②)  
 には、「下臈」の選ぶ安直な「申しやす」さへの見下しが感じられる。明確にプラス評価を伴うと思われるのは、平家物語(覚一本)の

⑩ 「馬はかけんとおもへば弓手へも馬手へもまはしやすし。舟はき(ツ)とをしもどすが大事に候」

(同 卷十一 逆櫓 下三〇四⑩)  
 という例程度である。

このような事情もあってか、この時代においては「ヨシ」と共通の動詞が上接する例を(とりわけ同一作品や同じ筆者の作品で)見出すのは難しいようである。

### 三 中世後期～近世

#### 三一-1 中世後期口語資料

中世後期の口語資料では、虎明本狂言の場合、上接動詞ごとの用例数を掲げると

言ひ1 さし1 住み1 たらし8 使ひ1 つかまつり1  
 取り2 説き1 なぶり1 持ち1 呼び1

であり、いずれも意志的動詞であり、またプラス評価が伴う用例である点で、前代までと比べて特に目立った特徴はない。キリシタン資料でも同様である。

この時期において注目される用例が見られるのは抄物である。抄物には

○無意志的動詞が上接した例が見られる。

○プラス評価以外の「ヨイ」も見られる。

○「ヨイ」「ヤスイ」に同じ動詞が上接した例が見られる。

といった特徴が見受けられ、特に第一点・第二点は現代共通語には受け継がれていない用法と思われ、注目すべきものと思われる。

抄物のうちある程度まとまった数の「ヨイ」の用例が見られた資料について、「ヨイ」の上接動詞ごとの用例数を挙げると次のようである。(4) (用例数は、蒙求抄・毛詩抄は抄物資料集成の索引、論語抄は『論語抄の国語学的研究 研究・索引篇』によって検索・確認し得た数)

論語抄…心得1 乗り1 見2

蒙求抄…言ひ1 心得1 知り1 見3

毛詩抄…あそはし2 言ひ1 行き2 射1 教へ1 食ひ1

心得2 退き1 死に1 つき2 解き1 取り3

縫ひ1 見1 破り1 居1

これらはいずれも清原宣賢関係の抄物であるが、多くの抄物資料について行き届いた調査ができたわけではないこと、用例の検索を主に索引類によったための制約、資料自体の分量の問題等があり、清原宣賢に「ヨイ」を多用する傾向があるといったことが言え

るかどうかは、現段階では判断しかねる。

以下、特に延べ用例数も上接動詞の異なり語数も多い毛詩抄を中心に述べることにする。同抄は清原宣賢講・林宗二聞書によるものである。まず第一点に該当すると思われるのは次の例である。

⑩ 小サイモノハイニクヒゾ。又イアツレバ死ヨイ。大ナモノハイヨケレ共ソコツニ死ヌゾ。

(毛詩抄 卷十一 一八才⑩ 吉日)

⑪ ドロヲ以テ物ニヌレバツキヨイ様ナゾ。ヒキ事ニハ猿ノ木ニ上ルノヤスイニタトヘタゾ。(同 卷一五 八才⑪ 角弓)

⑩の「死ヨイ」は「ソコツニ死」と対義的で、狩で射られる獲物が「簡単に死ぬ」の意であろう。「死ぬ」は、自殺の場合以外は無意志的であろうが、そのような「死ぬ」に「～ヨシ／ヨイ」が接続するのは現代共通語では考え難いことである。<sup>⑤</sup>狩をする人間——獲物を「死ぬ」ようにしようとする——の立場からの表現で「～することが容易でよろしい」ということと考えられるので評価はプラス評価である。⑪の上接動詞「つき」は、意志的動作を表す他動詞「つけ」と対をなす有対自動詞ではあるが、それ自体は無意志的であろう。

第二点については、右の⑩の例は「角弓」という詩の「母教猿升木 如塗塗附(猿に木に升るを教ふる母れ 塗に塗を附るがごとし)」に対する抄文での用例であるが、単に中立的に泥というものの性質を述べているだけのよう思われ、そうだとすると「プラス評価の語」という点には当てはまらない。また上接動詞が意志動詞の例ではあるが、次の例もそれに該当しよう。

⑬ 賢者ハ進ミガタウテ退ヨイホドニ、敬順デナクバ得事ハアルマイゾ。

(同 卷六 一八ウ⑬ 兼叟)

この「退ヨイ」も、「進ミガタウ」と対になって賢者というものの一般的性質を中立的に述べているだけのものであるし、従って賢

者は求めても得難いという立場から述べているのだとすればむしろマイナス評価寄りとも考えられる。

⑩の例は第一点の上接動詞が無意志的動詞である点において、⑫⑬の二例は第二点のプラス評価以外である点において、①の「腐りよい」の例に通じるもののように思われるが、特に第二点については現代語の共通語はもちろん、その後の時代の文献資料でも現在のところ同様の例を見出すことができない。このような例がなぜ一旦は文献に姿を見せながら、その後の時代に引き継がれていないのか(あるいは精査すれば例を見つけられるのか)、①の例との連続性があるものなのかどうか等、検討の課題となる。

次に第三点の「～ヨイ」「～ヤスイ」に共通の上接動詞がある場合を見ていく。なお毛詩抄における「～ヤスイ」の上接動詞ごとの用例数は次のようである。

射1 行き1 聞こえ1 砕け1 退き1 取り1 なし1  
のぼり1 見1

である。「～ヨイ」「～ヤスイ」に共通する上接動詞は「射」「行き」「しりぞき」「取り」「見」であるが、この中で「射」は中世前期までは前掲⑦の例のようにもっぱら「～ヨシ」の方に上接していたようであるが、「射ヤスイ」の例が見られるようになる等、この時期には「～ヤスイ」の上接動詞にも広がりが見られるようである。それも「～ヨイ」「～ヤスイ」に共通の上接動詞がある場合の増加の一因であろう。

「射ヨイ」と「射ヤスイ」について見ると、「射ヨイ」は前掲⑩の例の中に「大ナモノハイヨケレ共」とあるものであり(他に「射」の意を表す「あそばし」が上接動詞である例が2例)、一方「射ヤスイ」は

⑭ 添阻ト云処カラ天子ノ射ヤスイヤウニライイルゾ。

(同 卷十一 二七ウ⑭ 吉日)

というものであるが、両者の間に意味用法の目立った差はない。「退キヨイ」と「退キヤスイ」の場合、⑬の「退キヨイ」に対して「退キヤスイ」の用例は

⑮ 君子ト云者ハ進ガタウテ退ヤスイ程ニ、ワセタリトモソコツニハデラレマイゾ。(同 卷四 十六才⑦ 丘中有麻)

というものであるが、やはり両者の間に際立った差は認められない。「行ヨイ」と「行ヤスイ」にしても

⑯ 流レニ付テ船ヲヤレバ行ヨイガ、サカノボルハ行ニクイゾ。(同 卷六 二八才⑨ 兼葭)

⑰ 埴ハ草ヲツイテアル程ニ上リヤスイゾ。阪ハカタクツレナ程ニ上リガタイ(中略)埴ニハ行ヤスイ、茄蘆ノアル阪ニハ行難イ様ナゾ。(同 卷四 三八ウ⑩ 東門之埴)

と、際立った差は読み取らない。「取りヨイ」と「取りヤスイ」、「見ヨイ」と「見ヤスイ」も同様である。この他『論語抄』でも「見ヨイ」と「見ヤスイ」の例がある(各2例)が、やはり意味の差を読み取ることには難しい。

なお中世前期までであれば「くヤスシ」は殆どがマイナス評価であったが、⑭の「射ヤスイ」、⑯の「行ヤスイ」はプラス評価であろう。「くヤスシ」がプラス評価を伴っても用いられる場合が増えたことがこれらの用例から伺われるが、「くヤスシ」のそのような変化や、その変化がどのような影響を「くヨイ」等に及ぼしたかについては、今後更に詳しく調査・検討したいところである。

三 二 近世

近世についてはまだ調査が不十分なところもあるが、文学作品における上接動詞ごとの用例数は表2の通りである。上接動詞が意志的動詞であり、またプラス評価が伴う用例である点では現代

表2 近世の「～ヨイ」

	醒睡笑	きのふはけふ	曾根崎心中	五十年忌歌念仏	夏祭浪花鑑	膝栗毛	梅児誉美	辰巳園	八笑人	浮名横櫛	三人吉三
閉き	1										1
暮らし				1							
こらへ		1									
し									2		
住み	2										
相談いたし										1	
使ひ	1										
勤め								1			
得心させ					1						
寝			1		1						
乗り						1					
わかり							1				

と比べても目立った差は感じられない。

一方「～ヤスイ」は、用例自体が意外に少ない。いくつかの資料について挙げると醒睡笑に「覚え～」「知り～」「もれ～」が各1例、近松世話浄瑠璃では『近世文学総索引 近松門左衛門』で検索し得る作品では心中宵庚申に「(人の気が)うつり～」が1例、春色梅児曆児誉美に「とけ～」「読み～」が各1例といった状況で、同一作品や同じ筆者の作品で、同一の動詞が上接する「～ヨイ」「～ヤスイ」を見出して比較することは難しい。

以上は文学作品を調査対象とした場合のことであるが、文学作品以外に目を転じるとどうであろうか。農書である伊予の『清良記』(二六二九～一六五四頃)、宮崎安貞『農業全書』(一六九七)における「～ヨイ」の上接動詞は次のようである。(6)

清良記…思ひ付き1 (業ひが) なり1 召し使はれ1 燃え1

農業全書…こなし1 作り1 (中打ちが) なり1 用ひ1 無意志的動詞「燃え」が上接した

⑩四、五両月の長雨に柴の枯れてもへきを焚せ

(清良記 卷七下 一一六⑩)

といった例が見られる点は近世の文学作品と異なる点といえようか。ただし抄物の⑩⑪のようなプラスの価値を伴わない例は、農書においても調査の範囲では見られない。また農書では話題の性質上「～ヤスイ」の用例も多く、

⑩ (麻は) 鹿鳥も付ず作りよきものなり。

(農業全書 卷六 三七⑩)

⑪ 楮は取分盛長早くして、作り安き物なり。(同 卷七 九四⑪)と、同一の動詞に「～ヨイ」「～ヤスイ」が接続した用例を見出すこともできる。ただし抄物の場合と同様、両者の意味・用法の差を読み取るのは困難である。

第一節で述べたように、現代語では同じ動詞に「～ヨイ」「～ヤスイ」が接続した場合、微妙ながら差があるようだが、そのような差はいつ頃生じたのか、現段階では明らかにし得ていず、今後の課題の一つである。

#### 四 おわりに

以上、不十分な点も多々あるが、「～ヨシ／ヨイ」の意味・用法のあらましを見てきた。二一で述べた対義語との関係の変化や、類義語「～ヤスシ／ヤスイ」との関係も更に掘り下げるべきところはあるが、総じて「～ヨシ／ヨイ」自体にはあまり大きな変化はなく、「主体側の『……することが容易でよろしい』『むずかしさ、苦しさがなく快感を覚える』というプラス評価の語」という現代語に関する森田良行(一九八二)の指摘が、ほぼ各時代を通じて当てはまるという結果と言える。

近藤明(二〇〇六)等で論じたように、困難表現では「～ガタシ」から「～ニクシ」への時代変化があり、現代語は「～ツライ」が「～ニクイ」に代って多用されるようになりつつある。形容詞系の難易表現という共通性を持ちながら、容易表現の方はあまり変化が見られないように見られるが、そのような差が生じる理由は興味の持たれるところであろう。

比較的变化の乏しい「～ヨシ／ヨイ」ではあるが、二一で述べたように抄物においては、プラス評価とは思われない⑩⑪のような用例が存在する等、異なった特徴が見受けられた。このような例に関しては、同節で述べたようなことが課題として残される。

なお、上接動詞に関しては三木望(二〇〇四)のように「非能格自動詞」「非対格自動詞」といった観点をとることも考えられるが、別稿を期したい。

## 注

- (1) 『朝日新聞』『週刊朝日』『AERA』の本文が検索可能。二〇〇一年九月二日時点での検索による。
- (2) 万葉集では「くアシ」は③の「行きあし」の例以外に「住みあし」が1例ある。
- (3) 浜松中納言物語には「いとおもしろき所におきふしやすく、月をも花をも見つづぐし給は」(巻一 一六四⑩) という例があり、「くヤスシ」に意志動詞「起き臥し」が上接したものにも見えるが、旧日本古典文学大系の頭注に「たいへんたのしい所として生活が安楽に」とあるように「名詞『起き臥し』+単独の形容詞『やすし』と解することも考えられ、確かな例とは言い難い。
- (4) 抄物という資料の性質上か、「心得」「知り」といった理解の意味を表す動詞である例が目だつといった特徴もあるが、「主体側の『…』」することが容易でよろしい『むずかしさ、苦しさがなくて快感を覚える』というプラス評価の語」という指摘の範囲内であろう。なおこれらの動詞はそれ自体は無意志的であろうが、「アプローチが意志的」(森山卓郎二〇〇二)と言える。(近世から見られる「わかりよい」等も同様)
- (5) 太平洋戦争におけるインパール作戦の際、日本軍が苦戦を強いられた「四二四一高地」を兵士たちが「死によい高地」と称したとのことであるが(伊藤正徳「帝国陸軍の最後 3死闘篇」角川文庫のち光人社NF文庫)、この場合「四二四一」との語呂合わせという面も考慮する必要があるだろう。この「死によい」の場合自嘲性も感じられるので、評価のプラス・マイナスも微妙である。
- (6) 農書に注目したのは、事物の性質や傾向、技術的難易性等を話題にすることが多いところから、多くの「くよい」の用例・また文学作品とはやや異なった用例が得られるのではないかと期待されること、かつ比較的平易な文体で書かれていることによる。ただし「ミのりよきものなり」(農業全書 巻一 七一⑤)のようなものを「動

詞『みのり』+『くよし』と見るか、「名詞『みのり』+形容詞『よし』と見るか、判断に迷うような場合もあった(この場合後者と判断)。「清良記」は伊予の土居清長の一代記的な軍記物であるが農書の内容を有する巻七(親民鑑月集)のみを調査した。「清良記」を選択したのは、伊予という地域性から、現代の①の用例との連続性が想定されるような用例が存在しないかという見込みもあつたことであるが、明確にそれと見られるような用例の存在は認められなかった。

## 参考文献

- 井上次夫(一九九八)「容易性・傾向性を表す『くやすい』の分析(大阪外大『STUDIM』二四)
- 井上次夫(一九九八)「傾向を表す表現について―くがちだ・くぎみだ・くやすい」『国文―研究と教育―』(二二)
- 小池清治(二〇〇二a)「難易表現」『日本語表現・文型事典』朝倉書店
- 小池清治(二〇〇二b)「傾向表現」(同)
- 近藤明・天谷友美(二〇一〇)『くヤスシ/ヤスイ』の語史への視点』(金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要)二二
- 近藤明(二〇〇六)『くニクシ/ニクイ』の意味・用法の時代的变化―室町期以降を中心に―』(『国語語彙史の研究』二五)和泉書院
- 近藤仁美(一九八六)「多義の副詞『よく』についての考察」(『国語学研究』二六)
- 三木 望(二〇〇四)『くづらひ』について―自発と否定、可能の連続性―』(『日本語の分析と言語類型―柴谷方良教授還暦記念論文集―くろしお出版)
- 森田良行(一九八二)『基礎日本語1』(角川書店)
- 森山卓郎(二〇〇二)「可能性とその周辺―かねない』『あり得る』『可能性がある』等の迂言的表現と『かもしれない』」『日本語学』二二(一一二)

八尾由子(二〇〇六)「傾向を表す接辞 ガチ、ギミ、ヤスイ」(『岡山大

学大学院文学研究科紀要』二二)

山田進(二〇〇二)『「い」の意味論 意味と文脈』(『日本語 意味と文

法の風景―国広哲弥教授古稀記念論文集』ひつじ書房)

#### 資料

引用したもののみ。左記以外は旧日本古典文学大系による。

万葉集(旧日本古典文学全集) 宇津保物語(うつほ物語の総合研究1本

文編) 宝物集(宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引) 蒙求抄(抄物資料集

成) 毛詩抄(抄物資料集成) 清良記(日本農書全集十卷) 農業全書

(日本農書全集十二・十三卷)

なお用例の検索にあたっては公開されている索引類に加えて、国文学研

究資料館「日本古典文学本文データベース」を使用した。また次のものは

用例の存在を知るのに用いたほか、表を作る上での参考にした部分がある。

松浦照子・片岡信二・安部清哉(一九九一)「平安文学における形容詞対

照語彙表」(『フェリス女学院大学文学部紀要』二六) 安部清哉(一九九

三)「中世軍記物語五作品の形容詞用例数語彙表(稿)」(『玉藻』二九) 安

部清哉(二〇〇〇)「鎌倉時代十四文学作品の形容詞用例数語彙表」(『玉

藻』三六) 村田菜穂子(二〇〇五)『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』

和泉書院

#### 付記

本稿は平成二二年度～二四年度科学研究費補助金「日本語可能表現・難  
易表現とその周辺に関する史的 연구」(基盤研究C 課題番号22520  
460)の研究成果の一部である。